

バッキングムカギアシゾウムシ *Bagous buckingami* O'brien et Morimoto

【選定理由】

カギアシゾウムシ類は水辺の環境に特化したグループで、いずれの種も記録は少ない。また、灯火採集などで偶発的にとれることが多く、生態が分からず分布や個体数の推定ができていない。いくつかの種ではホストが判明しており、産地で個体数は少ないわけではないが産地は飛び石状である。

本種はガガブタをホストとすることが分かっており、比較的記録が多い種である。ただ、ガガブタの絶滅が危惧されるので当然本種も危険度が高いと考えられる。

【形態】

この属の特徴は脛節後半部で非常に強く内湾しカギ状を呈することである。別系統のイネミズゾウムシもやや弱いものの同様な形態を持つことから、茎などにしがみつくのに適しているのではないかと考えられる。カギアシゾウムシ類はよく似た種が多く同定は難しい。本種は他種と比べて顕著に細長く容易に判別できる。体長は3~3.5mm。



【分布の概要】

【県内の分布】

常滑市、名古屋市など。

【国内の分布】

本州、九州に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

ため池に生えるガガブタをホストにしている。ガガブタがあればどこにでも生息しているわけではなく、好みの環境があるかもしれない。灯火に飛来する習性があり、かなり遠方まで移動できると思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

古い記録がほとんどなく、個体数が減少しているかは不明である。最近ではあるが採集されているので、著しく減少してはいないと思われる。ただし、産地は局限されてしまった可能性が高い。要因としてはため池の消失、改修が大きいと考えられる。また、農薬の影響も無視できないと思われるが、どのように影響を受けるかという研究はないので想像の域を出ない。

【保全上の留意点】

ホストであるガガブタを保護することである。できれば一つの池だけではなく、周辺の池にもガガブタが生えていることが望ましい。越冬場所は分かっていないが、周辺の土手や林縁の可能性が高いので、それら周囲の環境も含めて保全を考える必要がある。

【関連文献】

C.O'Brien, I.Askevold & K.Morimoto, 1994. Systematics and evolution of weevils of the genus *Bagous* Germar (Coleoptera: Curculionidae) II. Taxonomic treatment of the species of Japan. ESAKIA, (34): 1-74.
村上哲夫, 1986. 猪高緑地内の池の魚類と底生生物. ため池の自然, (4): 7-8.

(伊澤和義)